

今日五日、早稲田大隈講堂の前で餅つきが行われました。福島県富岡町で今年収穫されたもち米です。大学の先生から「富岡町に行つて、コメの収穫をしないか」と誘われたのがきっかけで、十月に初めて東北の被災地に行きました。それまでは東北とは何の関係もなかったため、人並み以上に震災に関心があるわけでもない、普通の東京の大学生でした。

東北復興日記



早稲田大学2年 増倉陽一さん

120



現地で見て、考え、議論を

のです。駅やその周囲の商店街に人の姿はなく、役場は閉鎖されたままでした。

さらに驚いたのが、そんな中でコメを育てている人がいることでした。福島第二原発の近くの田

のぼにコメが作付けされ、金色の稲穂がたわわに実っていました。まさに収穫だけしてほしいという状況で、私たち大学生が呼ばれたのです。地元生産組合の方々に温かく迎えていただいたあ

の無関心を恥じました。作業が終わった後、現地の農家の方とお話すると、驚くほど「福島を何とかする」というエネルギーがあふれていて、圧倒されるほどでした。その中でも、皆さんが特に繰り返しおっしゃっていたのが「おかしいと思うことを東京で議論してほ

と、私たちは生まれて初めて鎌を握り、コメの収穫をしました。写真。作業をしながら、地震、津波、そして原子力災害と多くの困難を乗り越えてきた地元の方の苦労を思い、震災に対する今までの無関心を恥じました。作業が終わった後、現地の農家の方とお話すると、驚くほど「福島を何とかする」というエネルギーがあふれていて、圧倒されるほどでした。その中でも、皆さんが特に繰り返しおっしゃっていたのが「おかしいと思うことを東京で議論してほ

しい。そして行動してほしい」ということでした。普段、東京で暮らして

いると、不思議なほど平穩無事に生活することができます。そして、その何不自由ない暮らしが、東北の震災に対して徐々に広まる無関心の原因の一つになっているのも否定できません。まず現地に行き、見て、考え、議論することが、いま最も必要とされていることではないでしょうか。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。